HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学北方研究教育センター（編）『知里真志保人と学問』
Author(s)	田村, 将人
Citation	北方人文研究, 4, 99-103
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45286
Type	departmental bulletin paper
File Information	TAMURA.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈書　評〉

北海道大学北方研究教育センター（編）
『知里真志保　人と学問』
札幌：北海道大学出版会，2010.
本文 xi＋289 頁；事項索引 12 頁

田　村　将　人
北海道開拓記念館

2009 年は、知里真志保（生没年：1909～1961 年。以下、故人の敬称を省略させていただく）の生誕 100 年ということで、いくつかのイベントが開催され、本も何冊か出版された。『アイヌ神謡集』を著した、姉・知里幸恵（1903～1922 年）の生誕 100 年の時ほどの派手さを感じなかったのは、少しほっとした。弟・真志保は、研究者として数多くの業績を残し、文学博士となり、最後は北海道大学の教員となり 52 歳で亡くなった言語学者、そして民族学者だった。それでも、真志保と同世代のアイヌ史・文化に関する研究者たち、たとえば著作集がまとめられているような高倉新一郎（1902～1990 年）、久保寺逸彦（1902～1971 年）、更科源蔵（1904～1985 年）、河野広道（1905～1963 年）、名取武光（1905～1988 年）などそうそうたる研究者の生誕 100 年がこれほど騒がれず、対照的だということはどこか心に留めて置いても良い（和人によるアイヌ研究の負の側面を清算しきれていないなど、理由はいろいろあるのだろうが）。真志保にしろ、幸恵にしろ、知里姉弟がアイヌだったということが大きいように思われる。それでは、20 世紀初頭に生まれた同世代のアイヌの中でも、知里姉弟の存在はどのように位置づけられるのか。いま一度冷静にアイヌ史の中で検証される必要があるだろう。

さて、2009 年 2 月 22 日（真志保は 2 月 24 日生まれ）に開かれた、北海道大学大学院文学研究科（北方教育センター）の主催による生誕百周年記念シンポジウム「知里真志保　人と学問」を基にまとめられたのが、ここで紹介する書である。当日報告した方以外にも 3 名の方が寄稿されている。マルチな才能を持ち、複数の学問分野にわたり、刺激的な論を残した知里真志保という研究者を問い直すには、一つの学問分野で補完できないということが分かる。本書の目次をご紹介しよう。

第 1 部　研究者としての知里真志保
　第 1 章　民族自身による言語記録の重要性（津曲敏郎）
　第 2 章　知里真志保の描いたアイヌ学の構図（加藤博文）
　第 3 章　アイヌ研究におけるネイティヴの葛藤―知里真志保の場合（桑山敬己）

第 4 章　知里氏の民族誌研究の可能性―近世蝦夷地の漁場儀礼分析への応用の試み（谷本晃久）
第 5 章　知里博士のアイヌ語研究―合成名詞の構造をめぐって（佐藤知己）
第 2 部　知里真志保の足跡
第 6 章　北海道大学時代の知里真志保（小坂博宣）
第 7 章　樺太時代の知里先生（山口眞）
第 8 章　アイヌとして知里真志保に学ぶこと（横山むつみ）
第 9 章　知里博士に関する映像記録について（小野邦夫）
第 10 章　知里真志保の著作―主要著作目録と主要著作の出版事情など（出村文理）

第 1 部は、書名のサブタイトルにある「人と学問」のうち学問を扱ったパートである。第 1 章は言語学者による報告で、アイヌ語や極東ロシアのツングース系言語を例にして、近代化、グローバル化のなかで危機に瀕する少数言語の状況と、それを残してきたネイティヴの例(知里姉弟を含む)を挙げて紹介している。第 2 章が考古学者による考察で、知里の学問がどのように形成されたか、アイヌ語からアイヌ文化史研究へと深化した大きな流れを紹介している。第 3 章がネイティヴの学者として見た場合の知里と、その研究に関する文化人類学者による再評価。第 4 章は、知里の故郷・登別市幌別のサケを迎える儀礼に関する知里の論考と、幕末の文書資料を比較した歴史学的な考察となっている。第 5 章は知里の『アイヌ語入門』(1956 年) で取り上げられた事例の再考察で、知里の業績が現代の言語学の観点から再検討されている。

第 2 部は、知里の足跡を追うユニークな章立てで、まさに、サブタイトルの「人」のほうにあたる。第 6 章は、知里真志保を語る会事務局長の小坂氏による伝記。小坂氏には、『知里真志保　アイヌの言霊に導かれて』（クルーズ、2010 年）という著書がある。第 7 章は、知里が 1940～43 年に樺太の豊原高等女学校で教鞭を取っていた時代の教え子・山口氏による回想を交えた伝記。知里のアイヌ研究の基盤の一つは、樺太で培われたと言えるので非常に興味深い。第 8 章は真志保の兄・高央（たかなか）の娘・横山氏による、叔父・真志保の評価。当日、会場では真志保を題材にした詩（渡辺ひろし）が朗読された（本書に収録）。横山氏は、登別に 2010 年完成の「知里幸恵銀のしずく記念館」を設立した NPO 法人知里森舎理事長。第 9 章は、知里幸恵ほかアイヌ文化に関係した人物の映像記録を作成している小野氏による投稿。そして、第 10 章は『知里真志保書誌』（サッポロ堂書店、2003 年）の編集委員の一人である出村氏による、書誌学的な知里の業績の再評価。

知里真志保は何者かと問われれば、やはりアイヌ語をテーマに学位を取った言語学者なのだろうが、それ以外の学問分野での業績の影響はあまりにも大きい。誤解を恐れずに私見を述べると、知里の業績を正当に評価し学問として消化しているのは言語学の分野ではないだろうか（第 5 章では佐藤氏自身の考察のほか、切替英雄氏の 1984 年の論文に言及されている)。また、口承文芸研究の分野では、知里の論文をめぐる議論が盛んである（たとえば本田優子編『伝承から探るアイヌの歴史』札幌大学附属総合研究所、2010 年）ものの、知里の壮大なアイヌ文化史に関する仮説に対して民族学・文化人類学の分野はこれまで真正面から取り組んでこなかったように思える。このほか、〝もっとも〟人々の心を鷲づかみにする地名研究は、知里の盟友といわれた山田秀三(1899～1992 年)によって精力的に進められた後は、残念ながら理論的な研究は活発ではない。知里は厳しい態度で臨む研究者だったので、知里の業績を金科玉条として扱うような研究態度は許されないだろうと想像している。

ここでいくつか私の覚書を挙げることをお許し願いたい。

第 2 章加藤氏の報告は、知里の学問的な形成過程を概観しており、とくに知里の年齢、所属、主な業績を時系列に並べた表は、非常に分かりやすい。それを基に、知里の周りにいた人びとを整理し、言語研究を志すようになったプロセスを跡付けている。考古学者の加藤氏が着目したのは、東京大学の考古学者・駒井和愛（1905〜1971 年）が戦後網走のモヨロ貝塚の調査以降に提唱した「アイヌ考古学」という用語である。1980 年代に至るまで、アイヌ文化を知ることが「日本考古学において先史文化を知るための重要な手がかりとして認識され、〔…〕誰のための研究なのかという問いがなされてはこなかった」（本書 p.39）と指摘している。これに対して、無文字で歴史がないと言われがちなアイヌ社会について、言語研究をすることが歴史を紐解くことにつながるという、1949 年の知里の発言を引いて、知里の研究が民族史という大きな課題へ転換したと興味深い指摘がなされている。もっとも、壮大な文化史をテーマとした論文「ユーカラの人びととその生活」（1953〜54 年発表）が、後に歴史学の榎森進氏の論文で援用され、さらに口承文芸の研究者と議論が進められてきた。知里が英雄叙事詩（ユカㇻなどと呼ばれる一ジャンル）に現れるモチーフを、考古学上の約千年前の擦文人とオホーツク文化人の間の抗争という構図で解釈したことじたい、知里が同世代の河野広道など考古学者から影響を受けていた証左である。とりもなおさず、他分野の成果を応用するということは、仮に考古学の分野で擦文 VS オホーツクの対立の構図が見直されてしまえば、英雄叙事詩の解釈ひいてはアイヌ文化史の叙述も変更を余儀なくされてしまう危険性をはらんでいる。このような口承文芸の議論との関係から、該当する考古学の成果について知りたいところである。

第 3 章桑山氏の報告は、自身のテーマということもあり、ネイティヴの研究者としての発言・スタンスに焦点を当てたものである。これまで、アイヌとしての知里真志保がクローズアップされることはあったにしても、ネイティヴの研究者として、世界のほかの先住民（あるいは植民地の住民）との比較はされてこなかったかもしれない。エリートであった知里の場合、多くのアイヌとは異なった思想を持って生活していくにつれて、同じくアイヌと見なされるにしても、そこに「母集団のアイヌとは相当の距離があった」（p.54）とする。このようなネイティヴの中のエリートという視点は、日本における和人とアイヌの関係史を考える際に覚えておきたいポイントである。また、イメージという点では、差別、反差別いずれの立場であっても、いったんアイヌというレッテルを貼ってしまうとなかなかそれ以外のイメージを持てなくなることが多い。たとえば、アイヌだから劣っている、もしくはアイヌだから被差別体験があるに違いない、のような発言は善意、悪意の有無はともかくも、よく耳にする事例である。とかく情報の少ない少数者（もしくは心理的に遠い存在）に関してはイメージが固定化する恐れがある。たとえば、知里の苦悩を単にアイヌのものと見れば良いのか、エリート・アイヌとしての苦悩と読むべきか、まったく一個人の苦悩と考えるべきかは、それを受け取る側にこそ柔軟な思考が求められている。

たとえば、知里がアイヌ語やアイヌ文化を知っている人たち（インフォーマント）のことを「彼ら」（p.35）と呼ぶことがあったし、谷本氏の報告で引用された「新しい文化に同化してしまふこと」を「喜ばしく思ふ」（p.86）とする 1937 年の知里の文章（『アイヌ民譚集』後記）も、現在の我われには意外と思われるかもしれない。しかし、時代の文脈に再配置して考えると、同時代に刊行された北海道アイヌ協会の機関誌『蝦夷の光』に投稿された、当時の協会理事たちの思考と共通点がある。つまり、生活を改善し、和人との格差を縮めて、差別されないように努めようというような意味だ（田端宏「総説」『アイヌ史　北海道アイヌ協会　北海道ウタリ協会活動編』北海道ウタリ協会、1994 年を参照）。ただ、その反面、いくら和人と同じ水準に近づいていこうとしても、アイヌとして異端視され差別されるジレンマを、我われは同時に想起する必要がある。このような意味でも、知

里姉弟の存在を、同時代のアイヌ史の中で考え直す必要があると思う。

知里は「米英残存勢力の殲滅」という表現を使って英国人宣教師バチェラーのアイヌ語辞典を批判した。これまで見逃しがちだったが、桑山氏の報告ではアジア太平洋戦争という時代を背景にしたナショナリスト的な発言として指摘されている。ただし、バチェラーのアイヌ語記述に対する批判は、戦後1956年に出版された『アイヌ語入門』で山場を迎えると言えるので、ナショナリスト的な発言をするためのバチェラー（英国人）批判でなかっただけことは確認しておこう。

第4章は、日本近世史が専門である谷本氏の報告である。知里が執筆を協力した佐藤三次郎『北海道幌別漁村生活誌』（1938年）と知里の論文「アイヌの鮭漁」（1959年）にインフォーマントとして登場する人たちが生まれたころ、つまり日本史でいうところの幕末から近代初頭の文書資料に現れる漁場での儀礼を、知里が調査した時代と比較している。興味深いのは、『幌別』と「鮭漁」はほぼ同じ情報に基づいていながら、前者は和人的な文化要素を排除せずに記述された民族誌で、後者は伝統的なアイヌ文化の抽出に重きを置いているという指摘だ。谷本氏は、「地域社会に視座を定め、実地調査に基づいた詳細かつ複合的な民族誌叙述を残したのは、幌別と樺太であろう」と指摘しており評者も賛成する。幌別については谷本氏が詳しく紹介しているので、ここでは評者が専門としている樺太について一言しておきたい。

知里が樺太で教鞭を取るかたわら、樺太庁博物館の嘱託として樺太アイヌの村落に調査に入っていたのは、1940〜43年のことだった。1945年日本領樺太（北緯50度以南のサハリン）はソ連の施政下に置かれ、約40万人の和人の引揚げにともない、約1200人の樺太アイヌは北海道に渡ったので、終戦前の最後の時期に知里は樺太で調査をしたことになる。評者は、知里の村落論について検討したことがあった（「20世紀前半のある樺太アイヌ村落の歴史的な位置づけ」『北海道開拓記念館研究紀要』第34号、2006年）。知里が『地名アイヌ語小辞典』（1956年）で家 chise と村 kotan の説明のために挿入した村落（家屋配置）の模式図は、どちらも注釈なしで樺太アイヌのものである。樺太での調査の成果が、戦後の研究に活かされている。しかし、1940年代の当時、大部分の樺太アイヌは、樺太庁が数か所に集住させた村落に居住していたので、インタビューによって復元された図だったことになる。山本祐弘（樺太庁博物館長）と共著の未発表稿「樺太アイヌの生活」（『知里真志保著作集』第3巻所収）も、谷本氏が指摘する「鮭漁」の論文と同様、「アイヌの伝統的な民族誌情報のみを抽出して叙述されている」（p.104）と言える。知里の民族学的な思想の背景も、あらためて研究史の中で検証される必要がある。

さらに、晩年の知里は『アイヌ語法概説』（1936年）の改訂版として『アイヌ文法の研究―幌別方言を中心としたる』と題する著書の出版を計画していたという（第10章出村氏の指摘 p.266）。これを合わせて考えるならば、知里のアイヌ語・文化研究は、まさに幌別にはじまり、樺太での調査を経て（樺太方言が学位論文のテーマ）、幌別に終わろうとしていたとしても過言ではない。『分類アイヌ語辞典』や『地名アイヌ語小辞典』は、戦前の樺太に加え、戦後すぐの北海道内の調査結果が反映されている。知里はどのようにして各地でアイヌ語を採録したのか。当たり前のように利用している辞典の成り立ちを知りたいところである。

なお、手前味噌ながら、評者が勤務する博物館•北海道開拓記念館でも2009年5月に「知里真志保とこの100年」と題する3回連続の講演会を開催し、多くの方にご来場いただいた。第1回「アイヌ文化研究とその後」を北原次郎太氏、第2回「アイヌ文学研究とその後」を奥田統己氏、第3回「アイヌ語地名研究とその後」を切替英雄氏にお願いした。このうち、奥田氏は次の論文をまとめられたことをお知らせしておきたい。「知里真志保のアイヌ文学研究とその後」（『とどまつ』No.

34、社団法人北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会、2010 年）。

本書は、知里の生誕 100 年にふさわしく、多才な知里の業績を多面的に再評価し、これまでに出版されたいくつかの伝記を乗り越えた人物評価が試みられている。これが、20 世紀を生きた約 2 万のアイヌ史を考えるきっかけになれば良いと評者は考えている。